

新・瘠我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第三十四回 農村貧困と闘う拓殖大学卒業生

朝鮮が日本の統治下に入ったのは、明治四十三(一九一〇)年であった。大蔵省主税局長を経て朝鮮政府財政顧問としてこの国の農業近代化に身を賭した目賀田種太郎の尽力によって創生された組織が、朝鮮金融組合である。この組織の枢要ポストが拓殖大学校出身者で占められたことが特記される。この時期、台湾協会学校は東洋協会学校へと名称変更され、校名はその後も時勢の変化に対応して何度も変わったが、以下では拓殖大学に統一して記述することにする。

当時の朝鮮の農村は地主小作制度下にあった。

農民は高率の小作料と重税で苦しみ、増産意欲を阻喪していた。朝鮮金融組合の理事を務めた拓殖大学出身の山根諒は、当時の農村の窮状について次のように述べていた。

「当時の朝鮮の農村は全く疲弊の極にあった。毎年食糧を地主に仰ぎ、金融を高利貸に求めなければ生活の維持ができない実状で、農民は収穫期には収穫するが、その収穫物は直ちに右から左へと地主もしくは高利貸への償還に引き当てる有様で、収穫後二、三カ月を維持する食糧が残れば、先ず普通以上の部に属する位である。地主より春

夏の候、一石半を收穫期に返すのが普通である。金利も亦年七割二分にもなる高利であった」

目賀田はこの現状を打開しようとして決意、小作や小農など貧困農民を対象とする、小口・低利の金融機関である朝鮮金融組合の設立にこぎつけた。組織の広がりとともに、貧農の増産インセンティブが強化され、その成功モデルがいくつも生まれ、次第に朝鮮全土に大きな広がりをみせるようになった。その広がりを中心にしたのが拓殖大学の卒業生であった。明治四十一年の東洋協会専門学校の卒業式で、目賀田は次のように述べた。

「本校の卒業生の特色は如何なる仕事でも辞せず、即ち与へられた仕事に奮つて応ぜらるゝと云ふことを承り及んだのであります。私の短き経験に依りまして如何にも其の如く本校の卒業生は、其の就職の事務の如何を論ぜず、勇んで且つ奮つてこれに応ぜらるゝ実績を求めた次第でありまして、是に於て私は深く本校の卒業生の特色を喜ぶのであります」

明治四十(一九〇七)年七月に卒業式を終えた学生六十七名のうちの十八名、既卒者十二名を加えた三十名が、韓国政府財政部顧問部に向かい、そこから各地に向いて金融組合の創成に力を振るつた。明治の末年、拓殖大学出身者百一名中、地方金融組合に就任した者の数は五十名に及んだ。金融組合数は五十地域でその数は百二十であった。

チッタゴン大学教授のモハマド・ユヌス氏が、貧農を対象としたマイクロクレジット機関を創案し、その小口金融が功を奏して、貧困農民の救出に成功。その成果により氏はノーベル平和賞を授賞した。しかし、それより一世紀ほど前に、目賀田種太郎と拓殖大学卒業生が、同種のアイディアをもつて朝鮮を舞台に、実にみるべき成果を収めていたことに私どもは改めて注目したい。

拓殖大学出身の金融組合の理事たちは、いずれも朝鮮事情と朝鮮語に通暁していた。朝鮮という国の文化や伝統は、日本とはきわめて異質であ

る。それゆえ、一年間の朝鮮での現地教育が必要だと指導者は考え、拓殖大学は、ソウルに分校の設置を決定、明治四十（一九〇七）年三月に開校。茗荷谷の本校で朝鮮語、朝鮮事情、朝鮮史を学び、最後の一年間を京城分校で現地の雰囲気を感じながら修学することになった。

ノンフィクション・ライターの田中英雄氏は、『朝鮮で聖者と呼ばれた日本人——重松嗣修物語』（草思社）という著作を上梓している。この著作の主人公の重松嗣修は、朝鮮近代化のための「草の根」協力を献身した人物である。大正四年、拓殖大学を卒業すると同時に朝鮮総督府に入り、その土地調査局に勤務、済州島での実務に当たった。そこで朝鮮金融組合のことを伝え聞き、これこそ朝鮮の宿痾のような農村貧困を救済する有効な方式であることを直覚、組合に奉職を決意、朝鮮総督府を退官、平安北道の新義州の地方金融組合での見習いを経て、平壤から東北方向へ百五十キロほど離れた狼林山脈のなかの陽徳という町の金融組合

の理事となった。

のちに三・一事件といわれる反日的な政治運動が陽徳にも及んで、大変な騒擾事件となり、これに重松は巻き込まれた。暴徒に拳銃で右足を撃たれてもはやこれまでと観念したところを、金融組合所属の農民たちが必死で重松を救出、治療に当たってくれ、一命をとりとめた。

陽徳から元山に運ばれ、元山を経て平壤にたどり着いた。平壤の病院での治療が奏功し、病が癒える頃に今度は平壤の平安金融組合が重松を迎えてくれることになり、ここで勤務。右足は不具となつてステッキを手放すことはできなかった。

しかし、農民と一緒になつて貧困農村をなんとか開発したいという夢を捨てきれず、地方の一理事としての派遣を懇請する要望書を、重松は組合本部に出し、これが受け入れられて今度は平壤から東に四十キロの江東郡地方金融組合で働くことになった。

重松のアイデアは、一言でいえば副業の推進であ

った。養鶏の操業資金は小口で足りる、と思いを定め、妻のマツヨの共感を得て夫婦で江東郡の貧農の救済に精出した。田中秀雄氏の著作にはこうある。

「帰宅して妻に養鶏計画を打ち明けた。鶏舎を建てて、鶏を飼う。初めは少ないがいずれは相当な規模になる。卵から孵化させて雛を育て、成鶏にしてまた卵を孵化させて雛を、という形で増やしていく。有精卵を無償で農家に配布する。これは我々だけでやる。人に迷惑はかけられない。自分が孵化の担当。お前は雛の飼育をやってくれないか。自分はふだんは組合の仕事がある。全部はできない。しかし朝はできるし、夜もできる。その間はお前がやってほしい。『一緒にやります』とマツヨは言つて微笑んだ」

鶏が生んだ卵を市場に出し、売り上げのうち固定費用を差し引いた余剰を金融組合に預け、その貯金があるレベルに達したところとところで、こんどはこの資金をもって牛を購入させるといふ計画を重松は立てた。田中はつづける。

「昭和五年十月、江東農民が購入した牛の頭数は五十頭に達した。金額にして千二百円である。彼らの多くが初めて得た自分の牛であった。今まで必要なときは所有者から有償で借りていた。自分の牛であることは彼らにとつての歓喜であった。勤労と貯蓄が大きな生活の喜びになることを重松は農民たちに教えたのだ」

重松の活躍は朝鮮金融組合で広く知られるようになり、そのことが日本の皇室にも伝えられた。昭和九（一九三三）年一月、重松は高松宮家から農山村功労者として表彰された。目録にこうある。

副業奨励ニ力ヲ効シ農村ノ振興ニ盡サルル処歟
カラサル趣おむむき

宣仁親王殿下ノ耳ニ達シ功勞表彰ノ思召ニ依リ
有栖川宮記念厚生資金ヲ以テ銀製花瓶壹個賜與相
成候也ありすがわのみや

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、「成長のアジア 停滯のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。二〇二二年、正論大賞。